



新板
入

市伽名題紙衣

五





市伽名頭紙衣

目録度々巻

第一

右報おのゑ紙衣しやうしやうしつてゐるしやうしやう後本向の女房

仕立れ袖の衣しやうしやう開ひらきゐる世の仕立女房

足あしあて袴はかま子こと女房にようぼうれゐる女房

小袖こそでとわの太ふと居ゐり歌うたひてゐる女房

第二

市伽名の様開しやうしやうてゐる女房にようぼうが起おこすの文ぶん

好このまにききまがゐる女房にようぼうの三さん希き

人ひと同どうきは短たん人じん候こうと所ところの女房

おひのさうで力ちからあつた泉いづみ紙し衣え



第三

世田の螢尻いかけと出るるまが巧

刃渡のちまいあせゆく押おち

男の根もとてる起徒の血判

人を釣獵呼おひ一足死ね流る工

第四

女房愛のはおい死と曝のちあらぬ家

おどい湖のくおるあうれも後

粹がこじてもあぬとる刃の仕立

ねねの世切て梓とこ人が思後

一 左報おのちびつてる侍本所の女房

他よりいぬやうさねはれ家侍本所おどねを女房

陀い清いとまわつて世のちぬ女房の存記あねのねみ負と

盆のはちいさも大さ味とやうて川はむの吸おすてとる

あどとてとてとる女房もやうて帰のちいぬ老がそのう

ねんやとれわさびあふ根づいあねるさゆとと

いおね勝金外あふとて世田を本所がねえにや定瀬大屋

市目つけらる後世のちまきとるちにて休えの枕をひ

うけるあふひねる神樂といふ名歌のちうまはたとほと

られやまきかぬ意の語のちるまとせらるいハとわおと

けわいとけやれぬとてとるも百目計の難用にてお判のめあ



ハ勿論にそぐれ事はなかりとて中てさうらう侍てたきめらる
を大いさんの肝とつづいてあらまてふまにさうらうのう井い毫
けに桂てりあらはに都でけわふでより事はのたまふといふ名に
さけりやふまにび里へは越えられてゆふはたまふ方と自由
はつとてさうじのおおとあらはさふものでしてふんを
いふあまといづれ様とておれ軍は老の給ていふう
はさうのちを老とてさうのちのまはたも感へて我を
わすれと名をよびては黒けおつてい粹な極虎女命にてさ
は老とも言ておれいとおいとおれをのたまふうで糸の
増るふとさうらうらめ金まの表けるまにあらはる
まがまに名やあぞう

② 沙室の機用てるるたまが都徳の文云

あふの機り人の機りいといふと笑ひてさうも機り
いといふまにわにに機りての機りと機りて一
三筋町のたけもさうも機りては機りては機りては機りては
けのたまふういふあらはのたまふと機りては機りては機りては
はあらは機りては機りては機りては機りては機りては機りては
あらはらるるいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと
人同くしてさうらうのちのちいふとさうのちのちいふと
のちのちいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと
はさうのちいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと
れとさうのちいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと
白くはさうのちいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと
あふとさうのちいふとさうのちのちいふとさうのちのちいふと

[illegible]

漢の令入の天竺のやにまゝの泥の令あ打つのでござぬ。中
 くもてござる。世の中のおろそがりといふや毒くひいなるやね。
 尤はの令今まであらせ六げびよとくござる。ち色業をきこごさ
 までびかりけりたるやね。中に女房のまへ二面ござらんぞ。それど
 うゆ局がしてしまはんとするべし。やうな事を今限いの後には
 プンと女房の二面にひらくる所より名をもけずかたね推してえす。た
 めに外からみるに血刺した起信文けいその起信となるおめと
 のまじりある体い。うが嘘でござる。それらの泥人ものといふ日本の
 神をばうにもつて。まうあるおれ。筆抹よいじ石澤をみ、あ
 教う土間で踏むぐいとていね。ぐるると昔使に令のちくく
 布いたしごとくぬ。そのおいてるも失はぬ事におどす。
 びんをゆけるまじと。怖れ低入を切て後せいやくし。いまい。

舞もせひうねそ危ゆ人。あゝの里へしはあねあ。さひもふあひん
 せねさるにわひもてはひとお物。あまふまてなれよと面
 目うふごころ程は下さん。焼すていさなほの。あゝゆとらとせととの
 せり。こらとら。起徒より。ゆはの人ま入のおね根がやい。まは
 いふの中。とらとらのたを。せとら。あまねう。あつた。

(三) 荷國の堂貝尻いやはけと知る向まが巧

もんんど商人のえき^{りふ}にやわけまする。おろし利をすめんと。まくか主君はゆていす。
けいの起信とてあとのむすも。しもみおもそうに高きなり。祓ぐもの
えん男をもつて給ふには、何ぞ其角の神あることをせねばその紙
をはなれぬ。此の起信の用よりさへ。ほゝめの中に七つの枝といひ
あらざる也。松樹大石親のまことゆるかんがくちと云はるべき。もと合ふ計
あり。云々とはなく、おもしろい。わづらひ紙書方のよし。成ほど。

[illegible]



Handwritten text in a cursive script, possibly a title or header, located at the top of the page.

Handwritten text in a cursive script, forming the main body of the page. The text is written in a fluid, connected style typical of historical cursive.

Handwritten text at the bottom of the page, likely a signature or a concluding note.

